

【平成 20 年度倫理学専攻講演会講演要旨】

## 「やまと言葉の哲学」

----- 主体的日本思惟を求めて -----

村石恵照

アーサー・ケストラー：

If East is East and West is West / Where will Japan come to rest?

(東は東、西は西というけれど、日本はいずこに安住するのだろうか?)

### はじめに

冒頭に掲げたケストラーの言葉は、キップリング (1965・1936) の ‘Oh, East is East, West is West, and never the twain shall meet.’ (ああ、東は東、西は西、両者は決して共存できはしないだろう) のもじりである。ケストラーはハンガリー生まれのユダヤ人作家であり、世界中を旅し様々な国に居住し、ついに安住の地をイギリスに求めたかに見えた。しかし「1940年以降、私は英語で書き、英語で考え、読むものもほとんど英語である。・・・何年間か、一方では英語で考えながら、私は寝言では、フランス語やドイツ語やハンガリー語をしゃべっていた。」ケストラーが多言語使用者として、様々な国に居住していたことに本当に満足していたのかどうかはわからない。多彩な女性遍歴の持ち主であったが、1983年、ケストラーは最後の妻シンシアと共に服毒により自死した。

ケストラーに言及したのは、明治以来、海外に向かって外国語で自分の人物と思想を披歴した人物は、禅の思想家鈴木大拙、新渡戸稲造、岡倉天心、南方熊楠など至って少数であり、現代においても国境を超えて、外国語を使用して活躍する日本人の知識人（主として日本の政治・社会・歴史・文化について論じる立場の作家と評論家）が極めて少ないことに思いが至るからである。日本と欧米とでは歴史的背景がまったく異なるから、日本の知識人が、日本に居住して日本語で日本国内の知的市場の読者目当てに作品を発表する

こと自体は別に批難されるべきことではないが、ただ、いぶかしく思うのは、（自然科学の研究者はともかく）日本の著名な知識人があまりに西欧の思想に憧憬し追従しその紹介と解説をすることと、その知識を日本（の伝統・文化・社会）への批判に振り向けている一般的な非生産的思想傾向についてである。彼らは、いわゆる“進歩的文化人”とよばれているが、戦後日本の代表的存在が丸山真男（1914-1996）であるらしい。しかし丸山は『ソヴィエト神話』を擁護し続けてきたからこそ、朝鮮戦争に関してもベトナム戦争に関しても何らシャープな発言を残すことなく学者としての生命を終えた（城島了『歪曲される「オーウェル」』）ようである。

“進歩的文化人”の伝統を（無意識的にせよ受け継ぐ）日本の知識人はまず、マックス・ウェーバーやマルクスやハイデッガーやデリダなどを輸入し翻訳し、それを解釈し、多少の知識を蓄えてから、それらの所論の権威をもって日本人や日本社会の瑕疵を論じつつ論壇という仮想舞台上に登場するのである。彼らは国内で日本語で外来の思想を大方称揚しているのだから安泰である。

1959年来日したケストラーは、後に禅を手厳しく批判する文章を書いているが、日本人が一度英語で、自国の文化や伝統を擁護したり、西欧の一定の社会的政治的事象について批判したりすれば必ず手厳しい反論を覚悟しなければならない。このことは、かつて自らも禅を学んだ Brian Victoria の *Zen at War* (1997; ‘戦争に係わった禅’) における偏見に満ちた鈴木大拙批判に現れており、さらに *New York Times Book Review* で称賛されたベストセラー *god is not Great* (Christopher Hitchens, 2007) でも、その仏教に対する偏見はさらに誤解された形で引用されている。

総じて、特に戦後の知識人は様々な形で「西欧の近代」を鏡とせざるをえない状況に置かれていたのである。なぜか？ それは、「なにしろ明治の文明開化以来、西欧的なものへの劣等感は、少なくとも私の学生時代頃までは日本人の深層心理の奥深くに潜んでいた」（脇本平也（2007）『全仏 No.535』；1911年生れ、東京大学名誉教授、宗教学）からである。「西欧的なものへの劣等感」でなにが悪い、洋の東西を問わず、是々非々でいいものはいいのだ、と居直られれば言い返す言葉がないが、「相手方の価値観を基準に置いて自己批判を試みていると思われる点に問題がある」（前掲、脇本）のではないか。批判の鏡は西欧であり、批判の対象は日本であり、自分は鏡を掲げて様々な日本の瑕疵を指摘するのが“進歩的”である伝統は未

だに抜け切れていない状況に日本は置かれている。1960年代でも、この劣等感は知識人・研究者らに影響をもっていたようだ。「東洋には、哲学がないとか、美学がないとかいう人が、かなり多い。それだけならどうでもよいが、それが何か東洋人の頭の、西洋人のほどに発達しなかったかのように考えて、何か卑下する感じを持ちたがる若い学者がいる。この下劣感はいらぬ話だ」(鈴木大拙(1961)「東洋「哲学」について」)。思索・批判・批評の精神は国籍を超えて普遍的なことでははずだから、そこに勝手な西欧文化に対する劣等意識を研究者が持ち込むことが愚劣なことであるのは当たり前のことである。

宗教に言及すれば、カトリックを批判して宗教改革を実現したプロテスタントに最も発展した近代的宗教の模範像を見る、といったことは現代日本の知識人・宗教学者の間では影が薄くなってきたが、それでも「日本の戦後を代表する二人の研究者、中村元と平川彰の業績を時代とかさねあわせたととき・・・両者には意外な共通点が見えてくる。・・・ともにウェーバー流の解釈に通底している点である」、「中村元の仏教理解は、プロテスタント仏教や、さらにはウェーバー流の宗教理解にきわめて親和的である」(下田正弘(2005)「仏教研究と時代精神」；『龍谷史壇第122号』)。

当然のことながら西欧の近代は、それ以前の、奴隷貿易、魔女裁判、陰惨きわまりない異端審問、政治・経済・教会一体の植民地政策を歴史の前段階としているのであり、今日のパレスチナ、アフリカ、ミャンマー(ビルマ)、アフガニスタン、イラクに起こっている諸問題は、すべてかつての西欧植民地の負の遺産が清算されていないためである。しかし、概して西欧の体制派による歴史解釈は自分たちの負の遺産を上書きしてゆくから、コロニアリズム(植民地主義)は、現状の解決の困難な部分はそのままにして西欧の知識人がポスト・コロニアリズムを論壇・メディアで“論じることによって”言説操作が行われ、歴史的にコロニアリズムが克服されているように言説上錯覚させられる。

ユダヤ教、キリスト教、イスラム教という一神教の教徒たちは、互いに殺戮を繰り返しても一向に自分の所属する宗教情念に育まれた文明的・宗教的な所属については基本的に疑問をもたないが、ケストラーという、西欧の情念と思想の複雑な暗部と傾向を象徴的に一身に体現した知識人を思うとき、日本は東西のいずれに所属してその文明的地位を確定するのであろうか？というケストラーの指摘には、やはり西欧の知識人であると納得せざるを得な

い。けだし西欧の情念において魔女裁判、陰惨きわまりない異端審問は、背教に対して潜在的な恐怖心を西欧人の心の深部に植え付けたことだろうし、それは退屈を嫌い、生への強い刺激である悲劇を希求する屈折した情念を西欧人に植え付けたように思えるからである。外国、特に西欧の知識人等から、東西文明にかかわる日本の文明的所属に言及されると、日本人はある種の居心地の悪さを認めざるを得ないが、（反面において曰く言い難い居心地の良さを享受してもいるのであるが）、ともかく外部には説明し難い日本文明の性格があるのだろう。

しかし、このような居心地の悪さに劣等感を持って、西欧の近代を称揚したり、中国文明の負の歴史を強調したり、日本文化の特異性に自己満足して過度の優越感に浸ったりすることは、結局のところ常に“西欧の近代という仮想の鏡”の前に立って日本人によってしか評価されない進歩的知識人または偏狭な心性の日本主義者のポーズをとり続けていることに他ならない。そのような知識人の鏡の前での振る舞いについて、その善悪を言う資格は筆者にはまったくないが、「やまと言葉の哲学」の「まこと」の美意識にもとづいて、つまらないことだ、「そら・こと」だと感じるだけである。

要は、とにかく自分の姿勢は自分で決めればよいことである。その姿勢とは、ケストラと違って有り難くも日本に生まれたからには、六世紀以来連綿と続いてきた日本の伝統の根本にある、普遍的で良性と考えられる思想の基本を美意識にもとづいて自分で認めてゆくことである。

（本論で「やまと言葉の哲学」ということは、中国の学僧たち、たとえば天台大師が行ったような文献学を超えた、与えられた仏典の言説の背後に潜む意味を独自に解釈する立場をとっているが、天台大師の解説法は、すでに翻訳された中国語の仏教用語を自分の修道体験にもとづいて独自の解釈をしているのである点で、やまと言葉を中心に漢語を理解の補助手段とする立場からの「やまと言葉の哲学」とは基本的に立場が異なっている。）

## 「やまと言葉の哲学」の一般的解説

「やまと言葉の哲学」と副題の「主体的日本思惟」とは、どういう「こと」か？この題目自体が本論の意図するところを暗示しているから、まず題目の説明をしたい。

## 「やまと言葉の哲学」 (村石)

	「やまと 言葉 の 哲 学」			
(発音；やまと言葉)	ヤマト	コト	バ	ノ テツ ガク
(発音；中国語起源)				哲テツ (漢音)・テチ (呉音)
		コトーハ		学 ガク (呉音)・カク (漢音)
(文字)	ひらかな	漢字	ひらかな	漢字
(語源)	日本語	日本語	日本語	日本語

「やまと言葉の哲学」の題目は四つの単語から構成されているが、すべての単語が日本語であり、文字はひらかなと漢字からなっている。「やまと」はひらかな表記のやまと言葉、「言葉」は発音上はやまと言葉であるが、表記には漢字が使われている。「の」はやまと言葉の助詞であるが、連体助詞と考えた場合、「美しい日本の私」(川端康成のノーベル賞受賞記念講演の題目)の「の」と同様に、場所か所属か所有を意味するのか、この語を使用している筆者にもわからないところである。しかし、文章を書いている本人にも明確でない用法の語を使用していることに、本論の意図する「やまと言葉の哲学」のアナログ的性格がある。ここで「哲学」は明治期に造語された英語の philosophy などの訳語であり哲学と訳されたが、西欧の思惟との接点となりうるから、その原義は常に考慮しておかなければならない。

「やまと言葉」の「ことば」という語は、「こと」の「は・端」すなわち「断片」であって「こと」の十全の意味を伝えてはいないことである。だから人類は有史以来、つまり言葉を使用してきた以来互いに誤解しつづけて今日に至っているのであるが、このようなやまと言葉の言語観も「やまと言葉の哲学」の性格である。

「主體的日本思惟」とはなにか？「主體的」とは、“西欧の近代”を鏡としたりするのではなく、やまと言葉で「もの・こと」の「ま・こと(真相)」を求めるということであり、“日本思惟”とは、日本の国土に根差して歴史的に生まれてきた土着のやまと言葉を基礎として日本語を用いた思惟という意味で「日本思惟」なのであり、思惟自体は普遍性をもっていると考えられるので日本的思惟ではないということである。

## 「やまと言葉の哲学」の内容

やまと言葉の語根は約1300あると言われるが、「やまと言葉の哲学」

## 「やまと言葉の哲学」（村石）

という場合、それらの「やまと言葉」の語彙のみを使用して哲学することではない。しかし、いずれの言語でも、哲学の思惟にとって重要な語句は限られていて、やまと言葉では、「もの」、「こと」、「ことば」、「こころ」、「とき」、「ある」、「なる」、「する」、「かみ\*」、「いのち」などの単語を中心に特定の重要な主題を扱ってゆくのである。以下、「やまと言葉の哲学」の内包するところの要素について説明したい。これらは実は我々が無意識のうちにおこなっていることであるが、ただそれを自覚的に顕在化しただけである。しかしその顕在化については、筆者独自の観点がある。

（\*「やまと言葉の哲学」においては、やまと言葉と外来語とを区別するために、日本人の思考の根底にかかわる基礎言語の一つである「かみ」の語を、一神教のGodの訳として用いることを避けなければならない。Godは、日本語の一般的文章や論文においては常に「ゴッド」と表記すべきである。）

「やまと言葉の哲学」を構成する要素を以下、列記してみよう。

1. やまと言葉の複層的言語性・・・日本が中国文明から摂取しなかったものに纏足・革命思想・宦官・科挙の制度などがあるが、漢字とそれに付随する様々な中国文明のソフトとハードにわたる資産は、隠喩的に言えば「稚（わか）く浮き脂の如くして、海月（くらげ）なすただよえる（『古事記』）」流動的状況であった日本の「くに」に、歴史性を与え日本を文明化したといつてよく、日本という「くに」の血液に対する血管のようなものである。因みに「くに」には、漢語「國」のように、武装した城邑の意味はない。

そこで、やまと言葉を基礎としている日本語とは、意味と表記のそれぞれについて「二重言語」性をもっているが、「ことば」が「こと」の断片としてあることを含めて、やまと言葉を基本的語彙とした日本語は全体として二重言語を超えて「複層言語」である。

つまり、やまと言葉は、歴史的に密着した外国語である漢語を用いて協働的に説明することによって、語句が内包する意味の深層に近づくことができるのである。このことは英語においてアングロ・サクソン語がフランス語を摂取した現象（アングロ・サクソン語とフランス語の併存）とは本質的に異なる。つまり漢語は「こゑ（音声）」だけであったやまと言葉に文字表記を与えただけでなく、やまと言葉は漢語に触発されることによってその意味が

## 「やまと言葉の哲学」 (村石)

深められていく言語であって、やまと言葉は漢語無しには意味をなさない。当然のことながら音声のみの言語は歴史の実態として存在しえない。ゲートは、外国語を知らない者は自国語も知らない、と言ったが、その本意はともかく、やまと言葉とは、漢語を用いて初めてその意味が明らかにされうる言語であるという構造において、日本語は二重言語であるという意味を持つと同時に、先に「こと・は」について説明したように、「こゑ (音声)」の意味は、常に漢語に刺激されて日常的有効性の背後にさらなる意味の深層が暗示されるという構造をもっている点で二重言語を超えて「複層言語」というのである。これは仏教言語観での俗諦 (日常性の表層の意味；真意が覆われている「こと」と真諦 (意味の深層) に相応するだろう。真諦 (意味の深層) は、各語の「こゑ」とその表記 (かたかな・ひらかな・漢字) によって一般社会で是認されている表層の意味の常にその背後に潜んでいる。それぞれの「こゑ」の語の深層の意味は、独立して固定されているのではなく、様々な文学形式 (特に詩)、物語、儀礼、象徴によって“縁起的に”暗示されるところの「こと」である。

「こと」＝事と言の未分化



「こと」の断片としての「こと・ば」



やまと言葉 ← 漢語 (歴史的に、やまと言葉は、膨大な漢字  
という言語領域を背後に持つ言葉である)



(日本語の特殊性に・・・日本語 (やまと言葉＋漢語＋西欧からの外来語)  
限定された言語領域)



日常性の言語理解の位相・・・辞書の定義・共通認識に支えられた語の概念



普遍的言語の位相・・・・・・意味の深層・・・・・・表層の「こゑ (音声)」と「よみ (読)」  
(日本語の特殊性を超えた位相) と「ふみ\* (文・ブン)」の背後の真意

\* 文字 (漢語) は外来のものであるから「ふみ」は「文・ぶん」の音からでた語 (白川静説)

2. 柔軟思考（「やわらぎ」）と、その思惟の主体である「ひと」が求めるべき真実の「あり・かた」の根底をなす「ま・こと」の希求・・・このことの根拠は聖徳太子の「憲法十七条」に意図されている。

「憲法十七条」：一、和（やわらぐ）をもって貴しとなす。… 九、信（まこと）はこれ義（ことわり）の本なり。事（わざ・行為）ごとに信（まこと）あるべし。それ善（よ）さ悪（あ）しき、成り敗（な）らぬこと、かならず信（まこと）あり。

第一条に掲げられている「やわらぎ」の精神は仏教よりも上位の理念である。このことは現象的諸宗教のそれぞれの価値の相対化を意味している。聖徳太子の「やわらぎ」の柔軟思考・統合精神こそは一神教のイデオロギー性をも包含する理念である。つまり「ま・こと」（宗教の本質）は、究極的に個人の宗教生活に係ることであることと、宗教教理として言説化された言語体系とそれを支える聖職者たちの集団と宗教組織は、相対性の価値しか持ちえないということである。この「やわらぎ」の精神は、「ひと」にとっては「ま・こと」がもっとも重要な価値であるという「こと」である。

聖徳太子の精神をもっともよく尊重し「まこと」の真相を極めた人物の一人が親鸞である（「よしあしの文字をもしらぬ ひととはみな まことのころなりけるを 善悪の字しりがほは おほそらごとの かたちなり」（親鸞「正像末和讃」八十八歳）。「都の人は ことうけのみよくて まこと なし」（徒然草；141）の「まこと」は、人倫的立場での所論である。

「憲法十七条」は彼以後の日本歴史の価値にたいする神勅的メッセージとなったが、その後の日本の思潮は、親太子派、非太子派、反太子に分かれていった。「憲法十七条」の解説、神仏習合、天皇制などについては別に論じなければならないが、特に柔軟思考（「やわらぎ」）の思想は、妥協とか談合の精神とは異質のものである。

3. 縁起史観（仏教的構想力）・・・聖徳太子が「憲法十七条」と「三経義疏」を著わしたことから、「やまと言葉の哲学」にはおのずと仏教思想としての縁起観が内在的に密着している。一切の「もの」・「こと」の具体的顕現は歴史的世界であるから、そこにおいては一切の「もの」・「こと」は連動している歴史的世界であると考え、いわば縁起史観が「やまと言葉の哲学」の法則性である。一切の形而上学的思考（観念論、唯物論・神観念・心



理的、物理的な一切の事象)も縁起的歴史的所産である。縁起とは、いかなる「もの・こと・ころ」をも通徹している流動的(無常の)法則性そのものである。

「やまと言葉の哲学」や中国思想(儒教・道教)と異なって、西欧思想の二大支柱は形而上学における存在論と宗教教理としての一神教であるが、存在論と神とが結合したところに両者は動きが取れなくなっている。

4. 美意識・・・「こと」の意味の表出が「こと・は」であるが、これを漢字で「言葉」と表記して点で、ここにすでに一種の美意識が認められる。日本文化の様々な「道」は、その本質に「まこと」がなければならず、「やまと言葉の哲学」においては、美意識は善悪を超えた上位の価値観である。この美意識は「道」の実践において実現され具体化され体得されることである。宮沢賢治の「雨にも負けず」のなかで、喧嘩をしている両者をいさめるのは善悪・正邪の観念ではない。「つまらないから」やめよ!ということは、実は美意識である。道の文化は基本的に「ひと」の「まこと」の実現としての修道が本義であるが、そこには美意識の発現がある。この美意識については別論にゆずる。

5. 日本文化の実践体系としての「みち」・・・「やわらぎ(柔軟思考)」の精神と縁起史観が融合された複層言語を用いる思惟である「やまと言葉の哲学」において、「まこと」を求める「ひと」によって実践されるべき「こと」が「みち」である。「みち」は漢語「道(ドウ)」として表現されると具体化された実践的修道方法となる。一般的に、やまと言葉の同義語の漢語は、やまと言葉に対して、より限定化され明確化された概念である(いのち=生命;ころ=心理;もの=物質;こと=事件・事象)。「みち」は、これは比叡山や高野山での「仏道」修行体系に触発されて後に、特に室町期からは様々な道の体系が編み出された(茶道・剣道・華道・香道など)。道は日本文化における「まこと」の実現の手段であることが本意であるが、同時に一般人のだれもが楽しむことのできる、「あ(生)る・こと」(生命欲)を本性とする「ひと」の欲望の調和的制御機能をもつ文化活動である。この意味で「道」は、職業的であれ素人芸であれ、観客を前提とする各種の芸能・娯楽・芸術活動の根底をなす「こと」である。

6. 日本人についての自覚・・・『新撰姓氏録』(810-824)によれば、当時

## 「やまと言葉の哲学」 （村石）

京畿に居住の氏族1, 065氏のうち、渡来系の氏族は326氏であり、つまり当時の指導層の三分の一は大陸系の祖先をもつ人々であった。この事実の自覚的認識が「やまと言葉の哲学」を行う者の資格である。行基も渡来系であり、日本仏教を僧団として歴史的に確立したのは中国人の鑑真であり、広隆寺や伏見稲荷大社を創建したのは秦氏であり、法然、親鸞、道元、日蓮を輩出した比叡山延暦寺を建てた最澄が渡来人の末裔であることは、しっかりと自覚しておくべくことであり、この認識は、たとえ古代の記憶であるとしても、様々な日本の政治的・社会的事象についての判断の場面で生かされなければならない。純粋な日本民族など存在しないことである。

以上の六項目が「やまと言葉の哲学」を構成する要件である。それらにもとづいて自ずと、次の心的態度が生まれてくるはずである。

7. 諸民族の伝統の尊重・・・やまと言葉に漢語が密着して成立しており、日本人の知性には漢語の影響が宿っているのであるから、「やまと言葉の哲学」は土着性と外来性との結合を許容する伝統的思惟であり、したがって言語状況を異にする他の国々の伝統をも尊重する思惟である。

8. 外国語の習得の必要性・・・「やまと言葉の哲学」を志す者は、外国語の摂取は主体的に行わなければならない。「やまと言葉の哲学」にもとづく主体性を基盤としてこそ日本人は、他文化・他言語の習得を主体的安定をもって行うことができるのである。さらに中国語や日本の漢学の伝統も尊重しなければならない。

最後に、柔軟思考（「やわらぎ」）と日本思惟の本質である「まこと」の修道に生きたモデルとして、鈴木大拙の言葉で本論を締めくくりたい。

「今日のところでは、自分は世界人としての日本人のつもりでいる、そうして日本に——東洋に——、世界の精神的文化に貢献すべきものの十分に在ることを信じている。・・・西洋文化の精神を体得することは中々容易なことではない。日本文化のみが保存に価するものだと考えたり、西洋文化は、物質的だ、経済的だ、政治的だとのみ考えたりして、今度の戦争を起こしたような人たちには、到底わかるものではない。・・・それからまた日本は敗けた、アメリカはえらい国だ、何でも彼方の真似さえして跳ったりはねたりして行けば、若いものの能事畢れりとすまして行くものが多くなったら、これまた大変だ。

## 「やまと言葉の哲学」(村石)

要するに、東洋でも西洋でも、政治の機構は自由を主としたものでなくてはならぬ、そうしてこの自由の出处は靈性的自由である」(鈴木大拙「明治の精神と自由」、1947年)

(後記) 有史以来現代に至るまで、日本以外の国々が経験し抱え込んでいる困難な問題は、民族・言語・宗教にかかわるものであり、日本は、これらの問題で極度に未経験である。今後はこれらの問題に深刻に対処し、しかも世界に評価される仕方でも貢献しなければならないだろう。その場合、日本人としての主体的な思惟の立場が要求される。「やまと言葉の哲学」は、このような観点と関心からまとめたものであるが、その萌芽は、英文毎日(Mainichi Daily News)に書いた Kiku & Sakura シリーズ全100編のエッセイの一つ 'Mono, koto, kokoro' (Jan. 29, 1984)である。

(多くの文献を参考にして非常に有益な所見・知識を得たことによって本論は成り立っているが、特に『二重言語国家・日本』(石川九楊)には日本語についての斬新な知的刺激を受けた。紙幅の都合で他の参考文献は省略。)